

1. 目的

甚大な被害のあった岩手県沿岸部の協会の安否確認及び現状把握

2. 訪問地区

- ・ 3月22日（火）… 陸前高田、大船渡
- ・ 3月24日（木）… 釜石市、山田町、宮古市、田老町

3. 訪問者

- ・ 熊本葉一（岩手県自閉症協会 会長）
- ・ 小川博敬（岩手県自閉症協会 事務局）
- ・ 熊本勤子（岩手県自閉症協会 会員）
- ・ 菅原慶子（NPO 法人 いわて発達障害サポートセンター ええ町づくり隊 ）

4. 3月22日（火）

①被災地の様子

一関より国道343号を通り陸前高田に向かいました。山道を抜け、下り終えた後、やや平坦な土地になってくると高田が近くになります。どちらかという山裾にあたる地区を走っていると、川沿いのところにいきなり瓦礫の山が出現しました。津波の押し寄せた跡です。「まだ、山でしょう！？（現場はまだでしょう）」誰もが衝撃を受けました。ここまで津波が来るなどとは誰も想像できないような山のふもとの静かな農村地帯なのです。



異様な光景でした。道一つを隔てて、そちら側とこちら側では全くの別世界です。一方は、今までと何も変わらないいつも通りの町並みです。しかし、くると振り返るとそこは、瓦礫と化した荒涼たる地面が、見渡せる限りの地の果てまで続いているのです。見慣れた土地なのに、そこが一体どこなのか分からなくなります。

瓦礫の中にわずかに作られた道路を車で進んでいくと次々に異常な景色が出現します。電柱が突き刺さりひっくり返った家、その上に積み重なっているつぶれた車。鉄筋の建物の屋上に乗っている船。つぶれた家らしき木とコンクリートと泥の塊、塊、塊・・・。

想像を絶する景色が何処までも続きます。



②避難所の様子

避難所は、大船渡73か所、陸前高田87か所。会員がどの避難所にいるのかという情報を持っていないくはとても探し出すことはできません。少ない情報の中で、大船渡のリアスホールにいらっしゃることを聞き、はじめにそこを目指しました。後は、知り合いのいる学校と支援学校を頼りに情報収集をしました。

避難所となっている建物によって環境はずいぶん異なります。

学校の体育館では、寒さが厳しく、少ない灯油をやりくりしながら暖を取っていました。また、体育館の広いフロアは、人の多さが気になります。子ども達は元気に走り回りますし、話し声をはじめとする様々な音が響きます。リアスホールは、近代的な建物であり、寒さなどはしのぎやすいようでした。また、区切られたスペースが沢山あり、避難者が多い割には、比較的落ち着ける場所の確保ができていました。どちらも、水が出ないため、トイレの汚物処理や十分な清掃ができずに困っていました。トイレと入浴が思うようにならないことは大きなストレスです。



③協会の様子

大船渡、陸前高田の協会員は、12家族。そのうち、家を流された方は、5家族、避難所で生活されている方は、2家族です。母親が行方不明のところは1家族ありました。

避難所で生活されている Yさんは、はじめ中学校の体育館を避難場所としていましたが、お子さんが落ち着かず、やや多動になったり声を発するようになったりということがあって、周囲の避難者から注意を受け混乱したようです。その後、避難場所をリアスホールに代え、落ち着きを取り戻したようです。

<母親の話>

「体育館にいた時は、落ち着かなくてびよんびよん跳ね回ったり声をあげたりしました。その音がドンドンとうるさかたらしく、周りにいた方が、「うるさい」と怒鳴ったんです。でも、その方は、普段一番息子をかわいがってくれていた方でした。誰がやったかということもよく見ずに、その方も余裕がなかったのだらうと思います。」

「その後、子どももこの状態は長く続きそうだということを悟ったようで、日中はとにかく毛布をかぶって寝てしまうようになりました。リアスホールに移ってからは落ち着いています。」

「市の雇用促進住宅や母子寮を、お年寄りや障害のある方を優先に貸し出すそうです。わが家は母子寮に入れることになりました。風呂やトイレが共同ですが、ひとまず安心しています。」

「でも、私達はこの子に救われたんですよ。避難場所は決まっています、津波が来たときそこに行こうとしたのですが、行くまでに一度土地の低いところに下がらなくてはならないのです。その道が渋滞していて止まっていた車は全部流されてしまいました。この子が、「そっちに行かない」と言ったので逆の方に逃げたのですが、もしそれがなかったら私もこの子も津波に巻き込まれていたと思います。また、避難してからいろんな方に声をかけてもらったり助けてもらったりしていますが、みな、この子のつながりのある人たちです。子どもに感謝しています。」

確認をしに気仙光陵支援学校に行きました。校長先生と副校長先生が対応してくださいました。ここで協会のほとんどの方の安否確認と現状の把握ができました。震災当初は、支援学校で数日預かり、家庭や行き先が決まり落ち着いた子どもから家に戻っていました。適切に配慮して子どもたちを見守っていることが分かりました。

5. 3月24日（木）釜石、山田、宮古、田老

①被災地の様子

北上から国道107号線を通り遠野市を通って釜石に入りました。釜石は、海から内陸まで山に囲まれた細長い土地です。山側から市内に入り海辺を目指しました。陸前高田は、町のほとんどが津波の被害を受け壊滅的な状態でしたが、釜石は市の半分以上は

ほとんど普段の様子とは変わりませんでした。物資は内陸と同じように不足気味でしたが、お店やスーパーなどの大型店舗、銀行などちゃんと機能していました。そういったところに行けば、ある程度の物資は誰でも購入できる状態です。宮古もそうでした。地域の地形によって避難されている人々の状況も必要な支援も異なります。



釜石の駅から様子が一変しました、津波の到達したか否かが大きな分かれ目です。釜石は、鉄筋の住宅が多く骨組みだけが残っていてそこに一般の住宅の瓦礫が集積している状態です。

同じ市内の海岸沿いは、まさに惨状でした。美しい砂浜で有名な根浜海岸は砂浜が消えていました。そして、消えた砂は壊滅された町並みを埋めていました。海辺に面した小学校と中学校の1階は砂と瓦礫で埋まっていました。



箱崎という地域には協会の実家がありますが、集落そのものが全壊でした。3階建てのビルほどもある頑丈なコンクリートの堤防に守られた集落ですが、津波はそこを軽々と越えてきました。家のあった場所に積み重なっている瓦礫や船は、その家の物ではありません。家のあった場所に行ってもそこに自分の家のものは見当たらないのです。それは、被災者にとっては、さらなる悲痛な思いでしょう。



山田町、田老町も海に面した狭い地域であり、土地の低いところは惨状です。

②避難所の様子

釜石、宮古とも100か所を超える避難所があります。しかし、前述した通り、被害を受けていない場所では町の機能が維持されています。いろいろなものが、全く手に入らないという状態ではありません。高田とは違う避難所の様子があります。町が無くなった被災地と町の機能が維持されている避難所は大きく違います。

③協会の様子

釜石から宮古にかけての地域には、15名の会員がいます。家が津波で全壊した方は2家族でした。家族の皆さんは全員無事でした。他の13名は家がやや内陸にあったため大きな被害はありませんでした。

被害にあわれた2家族のうちの1家族は、避難している場所が点々としており、結局お会いすることはできませんでしたが消息はつかめました。二人のお子さんを県内の親戚のお家に預け、ご両親は宮古市内に移っているとのことでした。もう一人の被害にあわれた方は、親戚の家に身を寄せたとのことでした。

6. 被災地を回って感じたこと

①自閉症および発達障害児の避難の様子について

比較的障害の重い方は、支援学校や施設との関わりがあります。そこで安否確認や必要で適切な支援が受けられていると感じました。むしろ障害程度の軽い方の方が問題が発生するのではないかと感じました。通常学級にいるようなお子さんの場合、適切な支援等が受けられず、今回のような非常に大きな環境の変化の中で困難が表面化するのではないかと思います。

②ニーズの掘り起こし

ただ、避難所を巡っていたのでは、発達障害の困難を抱えている子どもを発見することはできません。皆が辛い状況の中で我が家だけがわがままを言えないという保護者の心理があります。ですから、きめ細かな情報収集をして、ニーズの掘り起こしをすることが必要です。その為には、地域の関係者（関係機関は機能しない）とつながっていることが重要です。

③ピンポイントの支援

不特定多数の人を支援しようとするとうろたえてよいか分からなくなります。自閉症協会としては、協会員を支援することを明確にしなければならぬと思いました。会員を訪ねて行き、お会いして窮状を聞くところからその後の支援の方向性が見えてきます。そういう動きの中で、協会員ではない自閉症の方の情報も入ってきます。発達障害の中でもADHDやLDの方よりもやはり自閉傾向の方の支援が必要だと感じました。同時にひきこもりや不登校の子供はどうしているのだろうと思いました。

④家のない子どもと家族を失った子どもへのケア

曲がりなりにも家が無事である子どもは、ライフラインが復旧するまでの困難を乗り切るとよいと思います。支援すべきは、家を失った子どもと家族を失った子どもです。この環境の変化は、長く続く（あるいは永久に）ものですから、より大きく継続的な支援が必要でしょう。大きな災害が起こった時に、いち早くこのような子どもを特定することが協会として必要なことだと思いました。

⑤休業中の支援

現在学校は年度末休業中です。それがよかったという面もあるかもしれませんが、別の問題もあります。学校が無いことは、子どもにとってあまりよい状況ではありません。学校そのものが被災したところもあります。日中やることが無かったり、今後の見通しが持てなかったりなど、学校の中での支援が受けられない状況は、マイナス要因です。

⑥継続的な支援

今回の津波災害は新たな課題が出てきました。

自分の家や財産だけでなく、住んでいた街そのものが無くなってしまうというものです。危機的な状況をしのぎ、安定を取り戻したところに「これから」という大きな困難が少しずつ明確になっていきます。それは絶望的な思いかもしれません。一時的な支援よりも継続的な物心両面からの支援が必要です。協会としてどのようなことができるのか早急に考えていかななくてはなりません。

⑦連携の重要性

今回、2日間現状の把握を主として被災地域を回りました。全くつながりのないところにただ行っても、かえって邪魔になるばかりだと感じました。どれくらいその地域との関係（連携）があるかということが重要です。

- a.協会のことをよく知っているということ（顔、名前、家族構成、障害の程度等々）
- b.地域の支援学校、福祉施設とつながっているということ（多くは、支援学校、福祉施設の方が安否確認、現状把握、適切な支援を行ってくれていました。）
- c.地域コーディネーターとつながりがあるということ（岩手は教育ではエリアコーディネーターが6人います。福祉では地域相談支援員が18名います。そのような方は、地域の細かな情報を持っていますし様々な関係機関をつないでくれます。）

⑧津波被害の特異性

- ・0か100か。津波が届いたところは財産の全てを失い、届かなかったところは全てが安泰で残っているという状況。
- ・それが同じ地域の中のこと（隣同士の関係の悪化）
- ・同じ避難所でも家がある人はお金があり何でも買える状況（避難者間の不公平感）
- ・被害を受けた家の場所にあるのは他人の家財（津波で移動して分からなくなった）

以上、被災地の様子をまとめましたので報告します。